

E-3 家政学原論における家族の捉え方について

—— 家政学を考える その2 ——

日本女大家政 ○小澤淑子 川崎衿子 三宅暢子 安間育美

目的 家政学の研究対象は、変容していく社会の中で流動的な状況におかれているが、その中核は生活主体である家族に他ならない。従来の性差による役割固定、家庭科男女別修等の矛盾は解消への動きをみせているが、これらは社会に於てのみならず、家族関係に内在する問題として捉えることが重要であると思われる。

本研究の目的は、今日までの家政学に於て家族がどの様に捉えられているかを明確にすることにある。

方法 対象文献は第一報と同様であるが、それらの中から、家族構造に触れている部分、及び全体を通しての著者の家族に対する特徴的な捉え方等を検討し類型分類を試みた。

結果 各著者の家族の特徴的な捉え方は、特に役割構造を通しての夫と妻の関係に顕著に現われた。それらを類型分類すると

1. 戦前からの封建的家父長制度に基づいて夫と妻の役割を固定しているもの
2. 夫と妻が対等な立場にあることを認めながらもその役割は固定的に捉えているもの
3. 夫と妻の役割は固定的なものではなく、各家族により個有のものであるとするものの3つに入別された。

これらは、必ずしも時代の流れに沿って段階を踏むものでなく、新しい著書にも1.に分類されるものがみられた。